

シノーケリングでイルカと遊泳

海の日サポートプログラム事業

NPO法人静岡マリンスポーツ振興協会は、日本財団の「あなたのみちの海の日サポートプログラム事業」の一環として、体験型イベント「海の未来を考えるイルカと環境問題2015」を、このほど淡島マリナーパークで開催。小学生二十二人が参加し、シノーケリングでイルカと海を泳いだ。

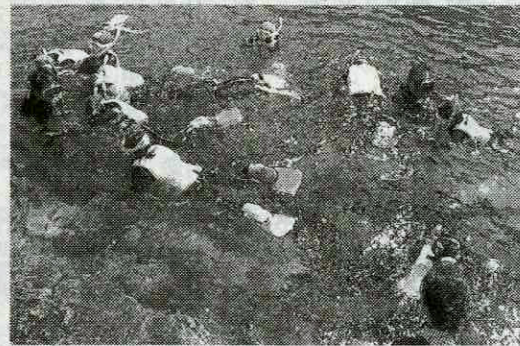
この事業は七月二十日の「海の日」二十年を記念して「海の日」の意義について認識を深めてもらい、海への好奇心を喚起して行動を起こすきっかけにしようとして、国を挙げて取り組む「海でつながるプロジェクト」の一環。



イルカプールでイルカを見て、飼育員の説明を聴く児童ら＝淡島マリナーパーク

行い、海上での思わぬ災害や事故に備え、自分の身は自分で守ることのできる子どもを増やそうと、着衣泳の講習なども行っている。

今回のイベントは、日本財団のサポートプログラム事業として初めて企画。三年以上



イルカプールでシノーケリングを行い網越しにイルカと泳ぐ児童ら

の小学生に参加を呼び掛け、海での本番に備えて事前に二回のシノーケリング教室を西沢田の東部スイミングスクールで開いた。

当日、参加した児童連はマリナーパークの海を網で仕切ったイルカプールを開いた。

波のある海で初めて体験するシノーケリングに苦戦しつつも泳ぎながら海中を観察。「キューキュー」というイルカの鳴き声を聞き、すぐ近く

を泳いだ。引き続き、マリナーパークの佐藤充館長が「イルカを取り巻く環境問題」をテーマに講演。ディスカッションを行い、参加した児童らはドルフィンスイムの感想や環境問題について意見を発表した。

児童連を引率した同協会の小林秀樹理事は「事前にシノーケリングの練習をしてあったが、海でも練習が必要だと感じた。今後もイベントを継続し、小学生に環境問題について考えてもらい、海への興味と安全への意識づけとともに、マリンスポーツの普及も目指していきたい」と話していた。

同席した工藤達朗教育長は、五六年に軽井沢で開かれた日本ジャンボリーにボーイスカウトとして参加したといい、「当時は生きている二ワトリを持って行き、参加者が自分で絞めて調理し、『命をいただいている』ということが実感できた。一生の思い出」と話した。

世界ジャンボリーに参加して班長を務めた佐藤圭次君(沼津二年)は、「外国のスカウトは、学校で学んでいる英語とは話す速さが違つたため聞き取れないこともあったけれど、時間がたつと慣れてきて少し話せるようになった。班員がよく働いてくれて、充実した活動ができた」と振り返った。

世界ジャンボリーの参加者

大会の様子を市長に報告

山口県山口市阿知須の千拓地から浜で七月二十八日から今日八日まで開かれた第23回世界スカウトジャンボリーに、ボーイスカウト沼津支部

(田村照児支部長)の中学二年から高校二年までの隊員八人が日本派遣団の一員として参加。十七日、参加者と同支部役員が市役所を訪れ、栗原裕康市長に大会の様子を報告した。

世界スカウトジャンボリーは、世界スカウト機構が主催するキャンプ大



世界ジャンボリーに参加し大会の様子を栗原市長に報告したボーイスカウトら＝市役所で

会。全世界の同機構に加盟する国のボーイスカウトにとって最大の行事。一九二〇年の第一回大会から、概ね四年おきに開催国を変えながら開かれ、日本がホスト国となるのは七一年に富士宮市の朝霧高原で開かれた第13回大会以来、四十四年ぶり。

今大会のテーマは「和(Wa): a Spirit of Unity」。百六十二カ国からスタップも含めて三万四千人のボーイスカウトが参加し、テントを設置して班ごとに活動する集団生活を実施。全体で行う体験プログラムを通じて、伝統と最新技術、平和への取り組み、環境や防災などについて学んだ。

栗原市長は「携帯やスマホが普及して便利なのでコミュニケーションをとっていた。参加したスカウトは二週間のキャンプ生活で貴重な体験ができたと思う。人生のプラスになれば」と期待を寄せた。

栗原市長は「携帯やスマホが普及して便利なのでコミュニケーションをとっていた。参加したスカウトは二週間のキャンプ生活で貴重な体験ができたと思う。人生のプラスになれば」と期待を寄せた。

生活に慣れてくる子ども達も、キャンプ生活しながら友情を深めるのは素晴らしいこと。ボーイスカウトは「生活に慣れてくる子ども達も、キャンプ生活しながら友情を深めるのは素晴らしいこと。ボーイスカウトは」

沼津柳壇

鈴あけび選

夏休み昔はみんな外遊び

【評】昔の子どもを詠んだ句に思われますが、実は「今の子どもは外に出ず、室内でゲームばかりやっている」これでもいいのかな、と今の子を心配している。昔の子を詠んで今の子の生活を考えさせる。川柳の面白さです。

掃除機に追い回される藤枕

【評】追い回されるのは「ゴロン」としている旦那様でしょうか、生活の様子がよく出ています。川柳は人間生活を詠む、よく出ています。

とんがって生きて丸い地球です

【評】「とんがって」の反語「丸い」で収めた技、実に見事です。先月の句と今月の句に作者の人間性が読み取れます。(絵を見ただけで、これは誰の作か分かる。絵の中に他の人とは違う個性がある、味がある。芸術の世界です。川柳もここまで達したら名人クラスです)

【例外】と「一般的」で的ぼかす 早川鉦二郎

【評】かたして「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

カブ隊が英語教室と交流キャンプ

ボーイスカウト沼津第4団(片浜、沢田、愛鷹、原、原東、今沢、浮島校区)は、富士市の英語教室イースターバニーイングリッシュスクールと合同で、カブ隊のキャンプを十四日から十六日まで足高の市立少年自然の家で開いた。

カブ隊のキャンプは毎年開いているが、他団体との合同プログラムは初めて。共通の関係者を通じて英語教室のサマーキャンプと日程を合わせ

カブ隊の二十人、英語教室の二十八人が参加。市内や近隣市町でALT(外国語指導助手)を務めるジンバブエ人一人、アメリカ人二人も指導者として加わった。

初日の夜間には合同ナイトウォークが行われ、カブ隊が先導しながら、子ども同士で交流。二日目の夕食時には、ALT三人が出身国の料理として、ポークピーンズ、ステーキ、トルティーヤ、チキンの蒸し焼きを調理。第4団は山形のイモ煮を用意した。両団体で料理を分け合い、イモ煮にはカレー粉を入れて味を変え、最後には、うどんを入れて味わった。

プログラムでは、ハイキングやキャンプファイヤーもあり、ALTが中心となって英語を使ったゲームが行われ、カブ

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます

【評】「アロー」で弁の立たない人がいます